

大豆の播種および初期管理について

令和4年7月11日
北九州普及指導センター
J A 北 九

1. 現在の状況

本年は、6月18日頃から大豆の播種が開始され、7月上旬には6割程度進んでいます。梅雨明けが早く概ね好天に恵まれています。降雨が少ないため、出芽や初期生育への影響が気になるところです。

2. 今後の播種について

7月下旬以降、播種時期が遅くなると生育量が不足し、最下着莢高も下がり、コンバインの収穫ロスも重なり低収となります。そのため、播種量を増やし、株間や条間を狭めて株数で補う必要があります。4条播きによる狭畦密植は、中耕管理ができないものの、最下着莢高の伸長に有効です。

(1) 播種密度

	条間 (cm)	株間 (cm)	播種量 (kg/10a)	株数 (株/m ²)
(2条播の場合)	70	14~11	6.5~8.0	26本程度
(狭畦密植の場合)	35~40	20		

(2) 播種深度

通常は3~4cmですが、乾燥が続く場合は5~6cm程度の深播きにしましょう

(3) 施肥

播種が遅くなった場合や連作田では、生育量確保のため基肥を施用しましょう。

肥料名	施肥量 (10a)	備考
ベスト444	15kg	連作田、遅播き

(4) 雑草対策

播種時に残草がある場合は、播種後~出芽前に非選択性の除草剤を混用して防除可能です(但し、周辺作物に注意すること)。

これから生える雑草への除草剤	既に生えている雑草への除草剤
ラクサー乳剤 またはサターンバアロ乳剤	左の除草剤に、ラウンドアップマックスロード または <u>プリグロックスLを混用する。</u>

※ホソアオゲイトウやホオズキ等が多発しているほ場では、ラクサー乳剤やサターンバアロ乳剤にフルミオWDGを混用すると効果が向上します。

播種後に降雨のため除草剤散布ができなかった場合は、本葉2~3葉期の中耕・培土を必ず実施するとともに、生育中期の除草剤散布も検討してください。

※除草剤は周辺農作物に飛散しないようノズルの調整等を十分行い散布して下さい。

4. 病虫害防除

ネキリムシ類は夜間に幼虫が地中から地表に現れ、地際部から大豆を切断します。播種後本田で、被害が見られた場合は早急に防除して下さい。

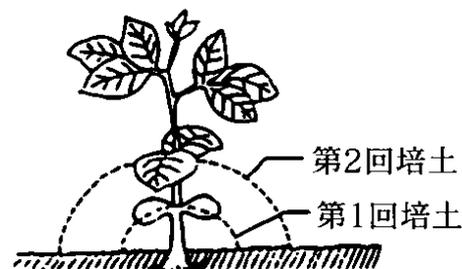
ネキリムシ類等・・・ネキリエースK 3kg/10a（播種時～本葉2葉期）

5. 出芽後の管理

中耕・培土

大豆の本葉が2～3葉（播種後3週間程度）から5～6葉期に1～2回中耕培土（土入れ）をしましょう。

中耕培土は、大豆の倒伏防止だけでなく、除草効果、土壌中の通気性を良くし根の発達を促す効果もあります。特に播種後の除草剤散布が出来ていないほ場や雑草の多いほ場では、中耕を出来る限り早めにしましょう。大豆の株元にしっかり土がかかるようにしましょう。



除草剤散布

近年、播種後の雑草が多いほ場が目立ちます。中期除草剤と中耕・培土を組み合わせ雑草の発生を抑えましょう。

対象雑草	薬剤名	使用量(10a)	希釈推量(10)	使用時期
イネ科	ホルトフロアブル	200～300ml	100L	イネ科3～10葉期
広葉	大豆バサゲラシ液剤	100～150ml (畦間散布の場合300～500ml)	100L	大豆の2葉期～開花前 (雑草の生育初期～6葉期)
広葉	アタックショット乳剤※1	30～50ml	100L	大豆の2葉期～開花前
広葉(アサギオ類)※2	パワーガイ液剤	200～300ml	100L	大豆出芽直前～3葉期

効果の発現には時間がかかります。大豆の開花期は、6月20日頃播種で8月10日頃、7月15日頃播種で8月25日頃となりますので、散布が遅れないようにしましょう。

※1 アタックショット乳剤は、ホアゲイトウや材ズキ等に効果が高く、ツクサやアメリカシロギサには効果が劣ります。褐変などの症状が出ますが、その後の生育に影響はありません。

周辺の水稲には、絶対に飛散しないように注意して下さい。

※2 帰化アサギオ類に対しては、使用時期に注意する必要がありますが(大豆出芽直前～3葉期)、枯死又は強い生育抑制効果が期待できるため、パワーガイ液剤が推奨されます。

乾燥対策

今後は、乾燥害も心配されます。もっとも水を必要とするのは開花期ですが、早目からできる対策を実施してください。

- (1) 出芽後は、本暗渠の栓を閉めて、土壌の乾燥を防ぎましょう。（但し、大雨時は栓を開ける。）
- (2) 排水路の水位が高い場合は、暗渠の排水溝から水を逆流させ地下水位を高くする。
- (3) 中耕・培土後の畝間かん水が効果的ですが、多量の水と多くの時間を必要としますので、地域で話し合いを行って、実施を検討してください。
(実施の目安は、無降雨日が7日程度続いた時)